

# 川下の風景⑬

## ～人生は川の流れるように～

米津 達也

### 【伝え続ける努力をした10年】

社会福祉士養成校で相談援助技術を担当して10年が過ぎた。過ぎてしまえば光陰矢の如し。しかし、振り返れば決して楽な仕事ではなかった。何しろそれが本業ではなく、あくまでも副業的にやらせて頂いたわけだから、プライベートにおいても多くの時間を割かなければいけないし、普段の相談援助業務を理論と照らし合わせて評価するには、多くの書籍を読み、研修を受講せざるを得ない。時間給で計算すれば、昨今のコンビニバイトよりも効率が悪いわけだが、一方で主体的に学ぶことを続けた10年でもある。誰かに言われて研修を受講するでもなく、自ら手を伸ばし、足を運び、時間を割いて資料を作る作業はこれの上なく専門職として有意義な時間になる。人としても大いに成長できた。それは生活の理解や、世の中の仕組みについて多角的に視野を持つことができたことに尽きる。理論、スキル、知識、これらは掘り下げれば切りがないが、私は福祉について崇高な考えを持つわけでもないし、学生時代から多くを研究してきたわけでもないで、せめて私が暮らす世の中や暮らしについて様々な視方ができれば援助のスタンスも変わるだろうと思うことでしかない。

考えてみれば無謀な挑戦でもあった。この業界に在ると意外に人に何かを教えたい、と望む人が多いことに気付かされるが、私は別にそれを願っていたわけでもない。たまたま縁あって出会った人に声を掛けられ、たまたま面白そうだと思って引き受けたが、最初にテキストを頂いたときは何のことかさっぱりわからなかった。つまり、如何に自分が我流の援助をやってきたか、そういう視野の狭さを知るところから始まった。思えば、1年目や2年目の学生の皆さんには申し訳ないことをした。よく年間60コマの授業が務まったと思う程にひどい資料も多かった。しかし、それをカバーできるだけの熱量はあったかも知れない。必死に自分の言葉で伝える努力はしていた。3年目や4年目になると借りてきた知識が多くなった。伝えることの専門性は高くなったが、自分の言葉で語らなくなった。いや、語る術を失くしてしまった。熱量が失われた授業は、空虚な知識で埋まり始める。ようやく知識と言葉が合致し始めたのは7年も8年もやり始めてからだろう。自分自身の中に余裕も生まれ、本業の相談援助業務と理論が上手にかみ合うようになった。冒頭、とても長くなったが、こうして振り返ると、やはり一筋縄ではいかなかった10年だと改めて噛みしめている。

### 【知ることを目指したインターンシップ】

折しも、どこもかしこも売り手市場と言われる。祝日のワイドショーでは熊本の小さな町が半導体バブルに沸き、土地や人件費の価値が急騰。田舎の小さな町で何もかもが取り合いになっている。昨日は日経平均株価がバブル期以来の

最高値になった、とこれもまた私から随分遠いところで舞い上がっている話題を眼にする。老後の資金がどうのこうので新NISAが云々と言われても、目先の生活運用で精一杯生きているのだから、こちら興味は薄い。そうやっているんなことに計画を立てて、豊かな生活を描い

てきても、「まさか、こんなはずじゃなかった」と老後の世界で苦しんでいる人々を多く視てきただけに他人の身勝手な投資話は鵜呑みにしていない。

多くの、特に地方の私立大学も学生獲得に苦慮し、我々のような地方中小企業も必死に働き手にPR活動をせねばならない昨今であるが、昨年から大学生のインターンシッププログラムを受け入れることとなった。今回参加した学生は兩名共に19歳。私の娘と同じ歳だ。奥手、人見知り、まあそんな若者もいるだろう。だが、思った以上に初日からコミュニケーションが上手く進まない。返事がない、反応がない、そうなるについこちらが一方的に喋ってしまって、気が付けば6時間ぐらい喋ってしまい、帰宅するとどっと疲れてしまった。缶ビールを呑みながら東京の娘に電話で相談したが、お父さんって怖そうだし、話掛け難いよね、と一蹴される始末。自他のイメージは合致しないものだ。

娘の時もそうだったが、19歳というのは丁度中学から高校に上がるタイミングでコロナ禍に見舞われた。卒業式、卒業旅行なども全て無くなり、一斉休校措置によって新しい高校生活も順当にスタートしなかった。中学は小学校の延長のようなどころはあるが、高校生になると一気に社会が広がる。生物学的にも大きな成長をきたすし、生態学的にも能力と生息域は大きく広がる。その出鼻を休校という形で挫かれ、その後もマスクや隔離に抑圧された環境下で成長してきた。

インターン学生 of 二人を見ていると、彼らは昼休みになると向かい合って座っていても互いに言葉を交わすことなく、スマホの個人世界に没頭している。居場所がきちんとそこにあるの

だ。前述したように、彼らの様子を見て社会の犠牲者などとは言わせない。就職氷河期だから、コロナ世代だから、とそれを言い訳にしてこの先10年も20年も生きるのか。前を向いて生きろとは言わないが、ただ、スマホから顔を上げて社会を視て生きろとは言いたい。そう教えてこなかった大人たちに。

#### 【彼らが知ったこと】

不安定ながらも5日間のインターンシップも終盤に差し掛かり、再び私のターンが巡ってきた。このプログラムでは最終日に成果発表をしなければならない。そんな奥手で、人見知りの彼らができるのだろうか。レポート提出にしようか。いろいろ考えたが、当初の予定通り、最終日に成果発表会をやることにした。それを作り上げる二日間。彼らの呼び方から変えた。勝手に愛称で呼ぶようにした。もちろん、彼らの同意を得て、嫌だったらちゃんと言ってね、と諭しながら実行したが、呼ぶこちらが気恥ずかしい。普段から人を愛称で呼ぶことなどない。それでも割にコミュニケーションは上手く行き始めたと思う。単なる時間の問題かも知れないが、何か変化を起こすのは相談援助の常だ。そして、彼らはちゃんとやり切った。8割ほどはこちらでお膳立てしたが、2割は自分たちの言葉でちゃんと語った。語ったという事実と、ちゃんとやり切ったという経験が大切だ。もちろん、それがどう今後の人生に活かされるかは知りようもないが、一歩でも進めた彼らを見送るのも私の仕事だと思っている。いつまでも付いて歩くわけにはいかない。

#### 【統合的、包括的】

社会福祉士養成課程のカリキュラムがいよいよ

よ本格的に新カリキュラムに移行する。4年生大学などでは先行しているが、私がお世話になっている養成校では2024年度からということになる。非常勤講師などは学校から毎年のオファーがあって仕事が成立するものだから、こちらがやりたいと言っても学校側の評価によって契約があるかは異なる。有難いことに、早々に新カリキュラムに対応したテキストが届いた。10年親しんだボロボロのテキストとはおさらばだ。

新カリキュラムは、私が担当する『ソーシャルワークの理論と方法』の内容も大きく改変されている。より細分化され、実践的になっている。キーワードは統合的、包括的という言葉。少子化に伴う働き手の減少は福祉の世界においても深刻で、これからの社会が8掛け社会になるのなら、福祉はより厳しい6掛け社会となることを覚悟しなければならない。つまり著しく援助者の数が減少するなかで、いつまでも専門分野に囚われるわけにはいかない。それが、統合的、包括的を押し進める背景なのだろうと、世相も垣間見える。これ自体はなんぞ悪いことだとは思わないが、理論としての包括的視点と政策としての包括的視点にズレを感じている。毎年、有難いことに40名程度の学生と対峙する。彼らが折角志したこの道を、負担と業務だけが一方的に押し付けられる業界にならないように、この世界で生きる私も一助の努力をしたいと思っている。

2024.2.23 米津達也